

## &lt;基調講演&gt;

## 森林開発と国民の森林意識

今永正明

(森林資源学講座)

## はじめに

このシンポジウムのテーマ「森林開発と国民の森林意識」に関連してここで二つの命題を提起する。

第一の命題は「森林開発」に関連して、「森林は常に存在するか」という命題である。

第二の命題は「国民の森林意識」に関連して、「森林は単なる天然物か」という命題である。まず第一の命題について、「森林がいかに簡単になくなるか」という衝撃的事実を紹介しよう。その一つはタイ国の例である。タイ国では1960年からわずか18年間で森林面積が半減したという。タイ国の1960年の森林面積は2,700万haでわが国の森林面積(2,500万ha)をやや越している。それが水田化、農地化され1978年には、1,300万haと半減しているのである。(堤 利夫:「タイ国の造林事情」1985年より)

つぎにブラジル南部二州の例をあげよう。ここではサンパウロ州で1850年の原生林の州面積に対する比率82%が1973年には8%になる。またこの州の南に隣接するパラナ州では1895年の84%が1980年には5%にまでなるのである。この原因はコーヒーの栽培を主とする農業開発だといわれている。

逆に森林が増加する例もみられている。

フランスでは大革命のあった1789年の森林率が15%といわれているが現在25%になっている。ドイツも同じ傾向にあり、例えば1830年頃のシュバルツバルトの森林率は20%といわれているが現在は60%となっている。ドイツでは今から20年ほど前に森林を他産業から守るために「森林基本計画」をわざわざ創設し、森林を他産業から守ることに成功をおさめている。

このように第一の命題は世界的にみて簡単に肯定できないものなのである。

次に第二の命題についてはいかがだろうか。

森林は単なる天然林であろうか。ヨーロッパの例からみてみよう。現在のドイツ、フランスあたりでは数千年前には森林がほぼ8割を占めていたといわれる。そしてその構成は広葉樹7割、針葉樹3割であったという。この森林も紀元後減少し、紀元1300~1400年頃には土地面積の約3割を占めるにすぎぬようになる。そして200年前には1割から2割程度までに減少したと思われる。森林の内容も粗末なものであった。ここでホッケニヨスの記述をみよう。「18世紀の終りには奥地シュバルツバルトにおいては全山が伐採され、広面積にわたる森林が失われ広大な、ただ灌木によってのみ覆われている裸地が広がった。今日では戦後のフランスの森林においてでも見られなかったようなひどい光景を当時は示していたものであり、森林の状態は地中海地域の国々とほとんど異なっていなかったのである」。(ホッケニヨス, F.,菅原 聡訳「我々の森林」1967年より)

こうした森林を再生したのが「林学」と「林業技術」であったといえよう。そしてここで驚くべきことが起こる。この200年の努力の結果、ドイツ(旧西ドイツ)の森林率は29%、フランスのそれが25%となったのであったが、その森林の構成がドイツとフランスで全く異なっているのである。すなわちドイツでは針葉樹主体で森林を再構成し、フランスでは広葉樹主体で行ったのである。すなわち現在の森林の構成はドイツ(旧西ドイツ)で針葉樹7割に対して広葉樹3割、フランスでは逆に

広葉樹7割、針葉樹3割となっている。ここに森林は単なる天然物ではなく、国民が作り上げてきたのが分かる。

このことは次の事実からも明らかになる。ライン川でドイツ、フランスが対峙するが、その両側にシュバルツバルト山地とボージュ山地が兄弟のように横たわっている。まことにこれは兄弟で、ライン谷の陥没以前は両山地は一つのものであった。従って、その地形、地質は同じと言える。ところが現在そこに存在する森林のたたずまいは異なるものである。ドイツのシュバルツバルトではトウヒを主体とした人工林が、フランスのボージュではモミを主体とした天然更新による森林がみられ、また森林一区画の大きさもドイツ側で小さく、フランス側で大きいといった違いもみられるのである。このように森林はその国の国民が造りあげた文化的所産であることを最初に指摘したのは北村昌美山形大学名誉教授であった。

ところがわが国ではどうか。

森林面積そのものは戦前、戦後を通して変わらず国土の7割近くを占めるのであるが、戦後その内容は変わった。すなわちわが国の森林面積2,500万haのうちスギ等の人工林が1,000万haすなわち森林の4割を占めるに至ったのである。

本来森林は国民の意識が林業技術者を通して造りあげられると考える。わが国では国民は総じて森林には無関心であった。その国民が人工林が造成され、間伐が必要になった段階で人工林に不満をもらすのである。造りかけた人工林は立派に育てあげなければならないし、また保続的な森林経営を行うためには今後も人工林は必要であろう。人工林と天然林のバランスをいかに保つかということが今後の重要な課題となろう。

それはさておき、国民の森林意識が森林を造りあげるとするならば、その森林意識の向上こそよい森林を造りあげる鍵となろう。こうした認識にたつて、まず国民の森林意識を把握しようとする試みが行われた。筆者もメンバーの一人である森林環境研究会では16年程前から「森林観の国際比較」の研究を行っている。

## 森林観の国際比較

従来、森林環境研究会で行われてきた「森林観の国際比較」についてみてみよう。

1978年、まず東京都民、その後日本では旭川市、鶴岡市、榎引町、伊那市、宮崎市で住民に調査が行われている。ついで西ドイツのフライブルク、ノイエンビュルク、ゲッチンゲン、ハノーバーの4都市で調査が実施され、さらにフランスのナンシーで調査された。標本は選挙人名簿を基本にランダム抽出され、郵送による調査を行ったが、東京とナンシーは面接によった。その後オーストリア、フィンランド等でも調査が実施された。今回のブラジルでの調査はそうした調査の延長上にある。

質問事項はおおむね次の内容に要約される。1)自然に対する素朴な宗教的感情に関するもの。2)樹木や森林に対する畏敬の念に関するもの。3)日常生活における森林の位置付けや、森林への愛着に関するもの。4)樹木への愛着や知識に関するもの。5)狩猟に対する考え方に関するもの。6)森林に人手を加えることの可否に関するもの。7)一対比較法による林相の好みに関するもの。

これらを総計13問にまとめ、そのほかに性別、年齢等の質問を加えている。各都市の標本サイズは400~1,200で回答数は200~500である。質問票は次に示す。

## ——森林環境対する意識調査——

本研究室では、現在「森林環境にする対する住民意識の国際比較に関する研究」を行っています。ここでは各国の市民、高校生、大学生等が森林に対してどのような考え方をいただいているのかを調査し、それらを相互に比較検討した上で、わが国の自然環境保全のための基礎資料としたいと考えています。回答は全体で何%として総計表にまとめますので、ひとりひとりのお答えは一切出ません。御協力を心からお願いいたします。

(各質問については該当する番号を○でかこみ、必要事項を記入して下さい。)

問1. あなたが旅行するとしたら、次のうちどこに一番行きたいと思いますか。

(一つだけ選んで下さい)

- |         |            |          |
|---------|------------|----------|
| 1 深い森   | 2 古い寺院     | 3 広い砂浜   |
| 4 高原の牧場 | 5 見晴らしのよい山 | 6 けわしい岩山 |
| 7 静かな湖  | 8 その他      |          |

問2. あなたは森の中を散歩するのが好きですか、きらいですか。

- |      |             |       |
|------|-------------|-------|
| 1 好き | 2 あまり好きじゃない | 3 きらい |
|------|-------------|-------|

問3. あなたにとって最も親しみのある木の名前を、五つあげて下さい。

- |   |   |   |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 |   |

問4. そのうちで一番好きな木は何ですか。 ( )

問5. あなたは、大きな古い木を見たとき、何か神々しい気持ちをいただきますか。

- |        |          |
|--------|----------|
| 1 いただく | 2 いただかない |
|--------|----------|

問6. あなたは、深い森に入ったとき、何か神秘的な気持ちをいただきますか。

- |        |          |
|--------|----------|
| 1 いただく | 2 いただかない |
|--------|----------|

問7. 「森や林、森林を美しく維持するためには、人間の手を加えなければならない」という意見と、「森林を美しくするためには、人間の手を加えるべきではない」という意見と、どちらが正しいと思いますか。

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1 人間の手を加えなければならない | 2 人間の手を加えるべきではない |
|-------------------|------------------|

問8. 次のスポーツの中で、一番好ましいのはどれですか。(一つだけ選んで下さい)

- |        |                |               |
|--------|----------------|---------------|
| 1 水泳   | 2 マラソン (ジョギング) | 3 ハイキング       |
| 4 キャンプ | 5 スキー          | 6 ハンティング (狩猟) |
| 7 ゴルフ  | 8 ヨットやボート      | 9 登山          |
| 10 魚釣り |                |               |

問9. あなたは鳥や獣をとる狩猟・ハンティングを、よいスポーツだと思いますか。

- |         |           |
|---------|-----------|
| 1 よいと思う | 2 よいと思わない |
|---------|-----------|

問10. あなたは、「農場や牧場や森がいきりまじっている、人手の加わった自然」と、「まったく人手の加わらない森林や荒地の、ありのままの自然」と、どちらが好ましいと思いますか。

- |             |            |
|-------------|------------|
| 1 人手の加わった自然 | 2 ありのままの自然 |
|-------------|------------|

問11. あなたは、日の出や日没、また静かな山のなかで、あらたまった気持ちになったりする事がありますか。

- |      |      |
|------|------|
| 1 ある | 2 ない |
|------|------|



### 3) 森林と人手の関係

森林を美しく維持するためには人手を加えなければならない。そのエピソードを司馬遼太郎の本にひろってみよう（司馬遼太郎「16の話」1993年より）。大久保利道は幕末に京都の嵐山を訪れるが、その折嵐山は美しく維持されていた。しかし明治6年頃嵐山を再訪してみると嵐山は荒れ放題となっていたという。そこで土地の人にそのわけを聞くと「昔の幕府はえらいものでした。この嵐山の景色が悪くならないようにお金をだして保存してきたのです。この山には景色をきれいにするための手が入っていたのです。絶えずそのために人が雇われて働いておったのです。それが新政府になって、そういう人は金がもらえないのですから、山に入らなくなりこのように荒れたのです。」といったという。大久保は本当だろうかと思ひ、後に東京で勝海舟に聞いたところ勝海舟は「そうなんだ。幕府は目に見えないところにお金を出してきた。政府というのはそうあるべきものなんだ。新政府はそういうことをやっていない。それはよくない。」と説教したという。

このようにこの問7には正解があって、「人手を加えるべき」が正解である。この正解率を見ると日本では、伊那、櫛引、鶴岡、旭川、宮崎、東京の順に正解率が、87%、79%、77%、62%、61%、45%と落ちていくのである。それに対してヨーロッパではドイツもフランスも80%を越す正解率を示している。

### 4) 自然に対する東京都民の感情

問6では深い森には入ったときに神秘的な気持ちを抱くかをきいている。東京以外では日本、ドイツ、フランス、全て80%以上が「いづく」と答えている。東京のみ53%と低い。

問5は、大きな古い木を見たとき、何か神々しい気持ちを抱くかという質問である。東京とナンシーを除くと、どこでも約90%の人が「いづく」と答えている。しかしナンシーでは70%、東京では58%が「いづく」と答えたにすぎない。問12は山川草木に霊がやどっていると思うかの質問である。肯定の回答はどこでも40%以上となるが東京のみわずか24%となっている。

以上、石田教授の所見を中心に「森林観の国際比較」の調査結果も見た。ここで結論を3つにまとめると、

- (1) 国と国との間の住民意識には大きく相違がある。
- (2) 同じ国の都市どうしの住民意識はきわめてよく似ている。
- (3) 日本の諸都市の中では、東京都のみ特異な反応を示すことがある。日本も、ドイツも国内での場所の違い（日本では北海道から九州まで、ドイツも北ドイツから南ドイツまで）や、また人口も東京都の別格（区部の人口、851万人）から日本で旭川市の35万人から櫛引町の9万人まで、またドイツではハノーバー54万人からノイエンピュルクの7千人まで、極端に差があることを最後に指摘しておこう。